# 四季録

## 諦観と苛立ち

東日本大震災から9年半。当事者の疼きは変わらずとも、多くの傍観者に痛切はなく、衝撃は薄れ記憶の底に沈んでゆく。

だが地震に限らず、太古から繰り返されてきた天災というもの。無意識の内にも刷り込まれ受け継がれてきたのではないか。そこには自然に対する畏怖と諦観があるように思える。津波が現に来るとわかれば逃げるが、いつか来るでは動かず暮らし続けるのだ。

しかし、諦観など持ち込めないものがある。科学の進歩によって明るい未来があると信じてきた人類は、初めて抑止せざるを得ない核兵器を持った。それは過去に経験のない潜在的恐怖を人々に植え付け、世の中のかたちをも変えた。

さらには原発に依存する世界を作ってしまう。人のコントロールを超えたものを、隠蔽体質の中で、膨大なエネルギーと交換に闇雲に推し進めた。福島の事故で化けの皮が剝がれても、この国では撤廃の大きなうねりも起きない。ここにはもう苛立ちしかない。地震と原発の被害は同質のものではないのだ。

人はまた森を伐り、二酸化炭素を撒き散らし、気候を歪め、無数の種を絶滅させてもなお、権力や富力を求めて猛進する。そのほころびを埋めようとするのも人間だが、遠く及ばない。暗黙の内に目を逸らし、ゆるやかに洗脳されるまま地球壊しに加担する。荒ぶる自然は逆襲の猛威にも見えるが、人間が招き入れた欲望の代償であろう。

そして今、急激な進歩を見せるテクノロジー。人工知能やビッグデータと凄まじく、これもまた制御の範疇を越えてゆくのではないか。サイエンスにも哲学があるはずだが、市場主義や効率主義に過剰な情報文化が相まって、思考能力も人の常識も奪い取る。

シンギュラリティーの闇の中、テクノロジーの暴発による想像だにしないしっぺ返しが世界を大パニックに陥れる。そんな現実が目の前に迫っている気がしてならない。

人は自然の恩恵で生き、人智を超える脅威には諦観を持って凌いできた。この先、人のふるまいに歯止めはかかるのか。今回のコロナウイルスも、生活圏の急速な拡大による自然破壊と無縁ではなかろう。この剥き出しになったものをメッセージとして受け止めなければ、またぞろ次のウイルスが襲うに違いない。

搾取競争による環境破壊が格差を広げる中、飢餓の傍らで飽食に明け暮れる人々。一度得たものを捨てられないのも人間。果たして享受してきた生活を見返し、文明を問い直そうとする動きは出てくるのか。それとも次の世代に語る言葉も持てず、流されるがまま沈黙を続けるのだろうか。

（吉田　淳治・画家）

愛媛新聞 :朝刊 2020/09/13 面名:文化 ページ:017

(C) 愛媛新聞社　無断転載、複製及び頒布は禁止します。